

2018年度GTセミナー 第48回保育環境セミナー 2018.9.3～9.5 前編

第80号 2018年9月10日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

第48回保育環境セミナー

2018年9月3日～5日に第48回保育環境セミナーが
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から130名程の先生方が集まり、各園の実践発表や園見学、
意見交換会を3日間に渡り行いました。

1日目 2018年9月3日(月)

- 10:00～ 園見学
- 13:30～ 見学園紹介
- 15:00～ GT活動報告
- 15:00～ 休憩
- 15:30～ 講演
- 17:15～ 意見交換会

2日目 2018年9月4日(火)

- 9:00～ 実践園報告
- 9:30～ 見守る保育の5つのポイント
- 11:45～ ミマモリングソフト紹介
- 12:00～ 昼食
- 13:00～ ドイツ報告
- 14:00～ Q&A
- 15:30 終了

3日目 2018年9月5日(水)

- 10:00～ 園見学



基調講演『見守る保育の考え方』

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さんこんにちは、台風が心配ですけど、それにめげず頑張りましょう。昨日まで長崎にいて、長崎のメンバーが指針の中に、卒園するまでに望ましい10の姿が出ているが、GT、「見守る保育」としての10か条の冊子を作っている。私は見守る保育的な10か条というと何が特徴なのかと考える。一つ目の健康の心と身体と言ったら、ということがGTらしいのだろうかと思ったり悩んだ。それから、「見守る保育」と言う言い方をしていると、「見守る」というと、そんなに手を出してはダメと注意する園長先生もいると重す。手を出してはいけないとなると、いつ手を出していいのだろうかと思ったり悩まれるだろうと思う。片付けをしない子を、どこまで見ていたらいいのだろうかとか、そういうことに悩まれると思う。どういう意味なのかという所だが、日本の中でも「見守る保育」が話題になったりするので、色々な人が使う。その捉え方も様々です。よくあるのが見ているだけとあるが、地域の見守り隊という地域を自転車で見回りしている人たちは、ただ見ているだけなのか？そんなことはない。何か事件にまき込まれそうになったら当然救い、見ているだけというのはありっこない。

—MIMAMORU—

これを英語にしたらどうか。私の本が英語・中国・韓国版が出ているが訳す人が困っている。インドのネルー大学のモトワニさんをお願いしたが、保育の専門ではないが日本語が達者で辞書も書いている。私の本を読んだときに、言われたのが「見守る保育」はありえない、訳せないと言われた。日本語でおかしいと言われたが、保育というのは「見守る」ことなので、そこに「見守る」と付けるのはおかしいと言われた。英語のタイトルはHOIKU。今年初めにシンガポールで「見守る保育」を取り入れた園が140園くらいあるが、向こうの人たちは見守るアプローチと言ひ、子どもへのアプローチの仕方を見守る観点からアプローチすると言ひ方をしていた。向こうでは「MIMA、MIMA」と言ひて最初分からなかった。見守るアプローチだと言ひていて、それを提唱しているのが私で、その方法論として英語にしているのがwatch&wait。子どものことをよく見て、見守りましょうと言ひ方をしていた。何でシンガポールで取り入れたかと言ひると、受験が激しくて、少子化になって、親が子どもに手を掛け過ぎて育たない。だから待ちましょうと言ひていてwatch&waitと訳していた。中国版を訳した人は、「保護型保育」から「守護的保育」と訳し、そのニュアンス難しいが、昔は子どもを保護するイメージだったがそうではなく、守護すると言ひ方に直してたりしていた。私の園を今日午前中見学してもらって、給食の場面も見てもらったと思いますが、最初に私が感動した動画を観てもらおうと思ひます。

（動画：おしぼりを入れにいく赤ちゃん）

—「見守る保育」の特徴—

この赤ちゃんは自分で這って、エプロンをしまいにいった姿です。これを観てどう思ひか分からないが、中国の方がこれを観て、「0歳をどう仕込んだのか」と聞かれた。皆さんは、「0歳でこんなことができるんですか？」と言ひたとします。これには「見守る保育」の特徴がいくつか表れている。一つは、赤ちゃんがこういうことをするのは、私の園の園児だからではなくて、今までだったらこれをする前に先生がやってしまうからこの姿がない。その多くは、赤ちゃんはしまえないだろうと思ひている。子どもが無理だろうと思ひているから先にやってしまう。すべての

赤ちゃんがこうなるかと言ったらそうではないが、ただ、赤ちゃんがやるだろうと放っておいてもやるわけではなく、この子はやるだろうと思うから手を出さない。手を出すか出さないかは子どもによる。この子に手を出さないのは、動画を撮った先生がしまうことを知っていた。しまいに来るけれど、袋にしまうことはできないので、広げることが先生が手伝う。その代り途中は手伝わない。これが一つの「見守る」で手を出していいかどうかではなく、この子がどこまでできるかが一つ。1つの見守る保育のポイントです。もう一つ、今度は何で、この子にこうするかというと、1歳児のしまう姿を見ているからです。仕込んだわけでも、教えたわけでもない。もし、この子が0歳児クラスの中で1年間育てていたなら、こういうことはしないです。異年齢児保育の目的の一つが、上の子の見て、刺激を受ける。そして、それを真似しようとするのも異年齢児保育です。子どもは、人間は人の真似をしてしようとする生き物ですから、昔は兄弟が家でみられたが、今日見学で見えていただくと分かるが、0から1が上を見て、生活できるようになっています。食事も手掴みしている子の向こうで、フォームしている子を見たりとか、少しずつ上を見て、刺激を受け真似をしようとする。先生が教えるのではなく、見る環境を作る。そして、それも異年齢児保育の目的です。これが2つ目。3つ目があります。この子はどの先生が見ているからです。もし、多くの園だったり、大学の先生が言っている担当性とやるとしたら、この子の担当がいるはず。この子がこっちへ行くことは止めようとするはず。こっちへ来たら、こっちに来た先生が見る。今日見ていただいた番号をつけて、部屋の中を歩いてもらったが、この日の何番ということになる。何番かの先生は手前で、子ども一人ひとりに担当が決まっているのではなくて、やることが担当が決まっています。これがチーム保育で、ローテーションしていきます。これが見守る保育の特徴で、そうしないとこういう姿にならないです。この子がすごいのではなくて、そういう環境だからです。もう一つ、成長展の時の動画を観てもらおうと思います。

(動画)

— 複数の愛着 —

この後のコメントに、「子どもたちは次第に色々な人という関係を広げていく」というコメントがあるが、この赤ちゃんは男性保育士がダメでした。そういう時は、女性の先生がいるので、抱っこするが、父親保育の日は女性がなくて泣いてしまったが、担任を見つけ抱かれると泣き止んだ。最近の研究では、赤ちゃんがよりどころとする人を複数持っている説が強い。そのなかの優先順位がある。ですから、普段は優先順位が低かったが、この父親保育の日にはトップに挙がった。赤ちゃんは複数持っていることでこういうことがわかってきた。胎内でお母さんの声を聞くことは、生まれた後に誰のところにしがみつけばいいか学んでいると言われていて、お母さんの声を聞いているから、お母さんの所に行くというのが分かって来たと言われていて、最近の研究ではそうではないことがわかってきた。かつては、女性にとって出産はリスクが高く、赤ちゃんを産んだ後に亡くなる率が高く、現在でも発展途上の国では若い女性の一番の死因は出産です。そうすると、お母さんに愛着を持って生まれると、死んじゃったらその赤ちゃんは困る。だからと言ってやたらでは困るが、現在はお母さんと同じ言語を話す人に愛着を持つと言われていて、ですから、ある意味で同じ民族の人、生まれた赤ちゃんにお母さんと同じ言語で物をあげるのと、他の国の言語で物をあげるのとでは、お母さんと同じ言語の人からもらうと言われていて、お母さんだけではなく、同じ言語を話す人。それが昔で言うと同じ村の人、部族の人に安心を示す。それはなぜかということ、他の部族を襲ってくることと、感染症の危険があった。アフリカは感染症が多い国で、同じ言語を話す範囲を狭くして、他の部族と関わらないようにしている。人は生きるために複数の愛着存在を持っていると言われ、その中に優先順位があり、その人がいなければこの人と決めていると言われていて、もう一つ分かっていることは、その子が置かれた状況によって人を選ぶこと

もわかっている。例えば、雷が鳴って怖い時は、平気そうな所へ行くとされている。愛着の落ち着くというのは、生まれた後の環境によって左右されるとされている。例えば、赤ちゃんとお母さんが一緒にいて、3分間で経って戻ってくると喜ぶ子と、お母さんが戻って来ても赤ちゃんがあまり喜ばない2通りある。その時に、非常に喜ぶお母さんの場合は、その赤ちゃんは不安な時にお母さん所へ行行って落ち着くが、しかし、あまり喜ばない赤ちゃんは不安な時にお母さんの所へ行かないそうです。愛着存在にならない親が愛着存在になるとか、決まった人が愛着存在が必要というのは、その子の経験にもよる。もう一つの実験があって、赤ちゃんとお母さんが歩いて、階段があって、お母さんは登り、赤ちゃんは上れず泣いているとします。振りむくと赤ちゃんが泣いているという動画を赤ちゃんに見せて、その続きを見て、赤ちゃんの所へ戻るお母さん。振りむいても。そのまま行ってしまうお母さんを見せるとします。安定型の愛着と言って、不安を受け止めるお母さんの元で育った赤ちゃんは、そのまま行ってしまうお母さんを見るとびっくりしてしまうそうです。逆に不安定愛着と言って、自分の気分で愛したり、愛さなかったりするお母さんの元で育った赤ちゃんは、戻るお母さんにびっくりするそうです。びっくりするということはストレスがある。子どもの所に必ず戻れば安定するのは違っているとされています。これまでの生活経験によって異なる。園でずっと変わってあげて、安心するのはそういう子どもと言われ、愛着は定義づけられないというのが研究であって、「見守る保育」ははっきりと言って、一番最初、卒園する前の10の姿をやる時に、長崎の人たちに言ったのは、私が「見守る保育の10か条」を作っています。その10か条にあったように、卒園するまでに作ったらどうかと話をした。その中に10か条があるが、最近は、中国で講演を頼まれるときは、10か条に沿って話すようにしています。一つが提案することであり、乳幼児教育法の特徴である。

—最初の提案—

まずこれは根拠があるのは、私たちの特徴であるゾーンを作るがどうということかという、私たちは子どもたちの発達を遂げるために、方法として幼児教育としてなされているのは、「環境を通して」行うことは基本であり、平成元年の幼稚園教育要領で定められたことです。私たちはよりよい環境を用意する。その環境に子どもたちが、自分から働きかけることが大事なので、先生たちは環境を作って、子どもたち主体的に関わり、自発的に遊び込めることなので、「見守る保育」に限らないが、自発的・意欲的な環境構成にしよう。子どもが主体的にやることで、ゾーンを作ろうと提案をした。それまでは学校のイメージがあるので、ガランドウで、先生が前に立って何をしましょう、絵を描きましょう、と言って子どもに画用紙を配って、カバンからクレヨンを持ってきて書かせていたが、それでは発達しない。発達は自分から書きたいときに書けるように、園に用意しておくべきなんです。それを提案したんですが、実はこれは「見守る保育」ではなくなってきています。これはスタンダード化してきています。幼稚園の施設整備指針があるが、皆さんの園は保育園が多いと思うが、幼稚園は文科省の管轄です。そうすると、学校教育があるので、小学校・中学とありますね。校舎建築があるので、文科省の中には校舎を研究するところがあります。学習指導要領が改訂されるたびに、どんな校舎がいいかを提案している。その中に幼稚園部会というのがあって、幼児施設もどうあるべきかを検討しています。改訂ごとに報告書が出されています。今年の4月に幼稚園教育要領が実行されているので、3月までに施設について園舎について提案されています。それに対して、厚労省関係は何とかしてほしいが、子どもを預かる場所としているので、福祉的な立場として用意しているので教育という概念よりも、衛生と安全の面にうるさい。どんな施設であるべきかではなくて、どのように安全を確保するかに厳しく、建物の指導をする。教育的にどうかではない。これからの幼稚園施設の在り方について、幼稚園の場にふさわしい豊かな環境づくりを目指し

てという冊子が出されています。この座長が長澤先生という先生で、GTサミットでお呼びした。この1ページ目に私たちがやっていたことがスタンダード化してきていることが書かれています。

—これからの幼稚園施設の在り方について—

参考資料: これからの幼稚園施設の在り方について～幼児教育の場にふさわしい豊かな環境づくり目指してから～幼児教育の場にふさわしい豊かな環境づくりを目指して～平成30年 学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議

はじめに：近年、少子化や都市化等の進行によって、友達との遊びや自然に触れ合う機会の減少が懸念されている。幼稚園教育は、これまでと同様に環境を通して行うことを基本にしていることから、幼稚園施設については、今後益々、幼児同士が関わり合ったり、自然との触れ合いを十分に経験したりすることが出来る環境を構成し、幼児の始発的な活動としての遊びを誘発する施設づくりが求められている。幼稚園は育ちの場であるだけでなく、親としての育ちの場でもある。また、地域における幼児期の教育センターとしての役割からも、保護者や教職員、地域住民を含め、幼児教育・子育てに関わる大人たちにとっても、学び合い、支え合い、交流することができる心地よい環境とすることが重要である。

全体の施設部会の部長さんが長澤先生ですね。この改訂に対して、具体的な施設が紹介されています。一つ目、国立のお茶代附属幼稚園。「多様なコーナーを設置し、自発的な遊びを誘導。園児の興味や関心に応じて柔軟に組み替えることが可能。」

まず多様なコーナー、自発的な遊びというのは、子ども自らこうしたいと思って遊ぶ。興味や関心に組み替えるのは子どもの興味関心に合わせて広げたり狭くしたりする。

2つめ、恵庭幼稚園。「家具により作り出されたスペース。お絵かきなどに集中することができる。」

今日見学した方が分かったかどうかかわからないが、3階に制作ゾーンがありました。カーテンが閉まって、掲示板があったと思うが、私はカーテンがあるのに閉めているのだらうと思った。今日数人の年長の子たちが来て、私たちは集中して制作したいので、少し暗くして区切ってと言ったそう。先生はカーテンを閉めて、掲示板を置いてその奥にやっていたと思う。そういう風に子どもたちの活動によって、変えられる環境。昔だったら厚労省だったら、死角を作ってはいけない、見えないところがあってはいけない。子どもたちも見えてばかりだと落ち着かないというが、先生がいることは把握しているし、危険になっていけばわかるが、いつでも見られていると落ち着かない。ある意味では四角っぽいかもしれない。

3つ目が、せんじひじり幼稚園。私の園に非常に似ている。「家具によりゆるやかに区切ることができ、同じ空間でも、様々な使い方ができる。」せんじひじり幼稚園の園長先生は足立先生というが、今年の保育所保育指針の改定委員になっています。元が幼稚園だが子ども園になって、私と2度くらいドイツへ行っているようで似ているのでしょね。

4つ目、港北幼稚園。「階段部分を書庫にしたり、段部に座れるようにするなど空間に変化を持たせる工夫がなされた読書スペース。園児が思い思いの場所で自由に本に親しむことができる。」これが実は、私からするといい例だと思わないのは、階段を上る人はどうするのだらうと思ってしまう。ただ、ドイツの考え方では本は何通りか目的がある。一つは私からすると、ある雑誌の企画で、それぞれの園長先生が薦める絵本ということで原稿を頼まれたことがある。そうすると、腹ペコ青虫、ぐりとぐら、とか出たが、私は3冊とも図鑑にしました。図鑑だって本。図鑑は図書館みたいなところで読むのではなくて、何かを調べたいためだったりする。私の園では、科学ゾーンに科学の本が

あったり、制作ゾーンには制作のところがあったり、本は読みふけるだけのものではない。ストーリーの本はうちの3階で見ると分かるが、一つは癒しの効果があるので、ゴロゴロして読むのは外国で用意されています。韓国でも絵本ゾーンにはクッションが敷いてあって、ごろごろして読むようになっている。ドイツでもそう。癒し+読書ということで、ストーリーを読む時は寛いで読むのが一つの役割です。机の前で椅子に座って本を読むことはあまりない、読み聞かせの時は、日本と大きく違うのは、一人二人に対して先生が同じ方向から本を読んであげている。日本のように集団みたいにあまりしない。紙芝居文化がない。数人の子どもたちに読んであげるのが読み聞かせ。もう一つドイツで驚いたのは、お昼寝をしない子たちは先生が読み聞かせをするのだが、40分も読むそう。先生2人が交代するそう。基本的に文章だけ。私は小学生1年生を担当した頃、読み聞かせをした時、すぐに絵を覗いたがるので、私はみせないで、後で感想絵と言って、まだ1年生なので感想の絵を描かせていた。民話の話を読み聞かせて、百足のわらじがあって、その話をするとムカデを知らないので想像して書く。絵本の1つは想像することが役割なので、絵を見せたりはしない。中々私の園でも出来ないししない。どうしても子どもに絵を見せながらやる。逆に日本が絵を見せることで漫画文化ができたのかもしれない。ドイツの本は挿絵があまりなく文字ばかり。小さいうちから40分くらい文章の本を読み慣れている。日本の子どもたちはあまり本を読まないし、想像しない。小学校でやったのは、裸の王様の本で私は触発されて感動して、本当のストーリーは別だが、お城の王様がいい洋服を作ってくれとそれで練り歩いて、子どもが騒いだという話だが、その話の後にある子が絵を描いた時に、お城を日本の名護屋城のように書いて、お堀端を、ふんどし一丁の殿様を書いたが、話だけだとそういうイメージになる。それでもいいじゃないと思う。絵は中身を決めてしまいかねない。小学校の国語の教科書には絵があるので、例えば、大きな蕪を知っていると思う。1年生では必ず出てくるが、最初びっくりしたのは、子どもたちがみんな知っていることと、あの絵はロシア民謡的。ロシア人のおじいさんをみんな思い浮かべる。ストーリーを知るよりも絵を覚えている。本当は、一読総合法をもって、一文ずつ読んで進めている方法があるので、その方法で大きな株をやったのだが、一読総で想像させる。おじいさんが株の種を蒔きました。どんな種だろうね？この株はどうなるんだろうね？おひさまが照って、雨が降りました。というように想像させる方法を取った。ただ、一行目で挫折した。どんな蕪だろうね、大きな蕪だよ、引っ張れないからみんなで引っ張る、と最後を皆言ってしまう。その時に何という早期教育しているのだらうと思ったことがある。それが今想像力がなくなると言われている。もう1つは、最近は見立て遊びをしなくなってきている。物が豊かで、子どもたちは森で遊んでいると、そこでままごとにしようとする。葉っぱをお皿にする、小枝を箸にして遊んでいた。今はおもちゃ屋さんがお皿を作り、おかずを作るとそういう想像をしなくなる。そうすると刷り込みを持ってしまうということで、1歳児に象徴機能という見立て遊びをするときに、おもちゃはなるべく具体物は置かないで、見立てるものを置くようにしている。ブロックをご飯にしたり、電車にすることを保障すると先生たちは嫌がる。ブロックはここで遊びなさいと言っても、子どもは持っていく。というようなことがあって、どれだけ見立てるかを保障できるかも環境づくり。思い思いの場所で、自由に本を読むことは賛成だが、階段に座るのはどうかと思う。そういうのが例に出ている。

次に、認定こども園さざなみの森。「幼児の特性に応じて、自発的・自発的な活動が促されるように屋内外の連続性や回遊性に配慮するとともに各室や空間の広さ、形、床レベルなどに変化などを持たせるように配慮している。」ここの園長先生も建築出身なので、こういうことが得意な先生。私たちの10か条と同じように自主的・自発的な活動が促されるように作るところが基本的なポイントです。

次が、中央区立の幼稚園です。「多目的室（奥と遊戯室（手前）は用途に応じてネットで分割が可能。多目的室のス

ステージは緞帳の裏にスクリーンを設置し、多様な使い方を可能にしている。踏み台もステージと高さを合わせることで、ステージを拡張することもできる。）

次が、認定こども園 Kids まゆみ。「ホールの段差部分が幼児用の座席になっており、椅子の出し入れにかかる苦労が無くなったとのこと。また、床板を外すと大人用椅子の収納場所にもなっており、保護者会や入園式などの際に素早く設置が可能。オープンキッチンシステムにより幼児が調理室の中を見ることが可能。建具を開放するとオープンテラスとなり、テラスで食事も可能となる。といった提案。」

私の園では防火シャッターをつけなくて、オール電化になっているので開けっ放しに、子どもと会話をしながら調理を出来るということで賞をもらった。

その次は、認定こども園さざなみ。「保育室の欄間に設けられたステンドグラス（左）や地域の原風景が一望できるスペース幼児の将来の思い出ともなる。」

恵庭幼稚園。「便所に窓を設け、採光や通風を良くするとともに、ドライ方式を採用することで清潔で使いやすい環境としている。」

あけぼの幼稚園。「出入りの多い1階は堅い樹種、2階以上は暖かみを感じられる柔らかい樹種を床材に使用。年齢に応じて、幼児が様々な素材に触れることができる環境を作っている。」

認定こども園さざなみの森。「延長保育の時間帯は、全ての幼児がホールに集まり、保護者が迎えに来るまで異年齢で遊んでいる。」

これが幼稚園側でもこうなると、私たちが最初提案した頃は、まだまだこういうことがなくて、私の園に来ると「目から鱗です」とよく言われました。がらんどうの部屋に、いろいろなコーナーが置いてあって、子どもたちがやりたいことをやっている姿を見て、そういわれたが、現在は幼稚園までも一般化してきています。それは、1条にある原則になったからです。

—見守る保育の10か条—

1条：子どもが自発的、意欲的に関われるような環境の構成と、そこにおける子どもの主体的な活動を大切にすること。（生活と遊び・ゾーン）

2条：子ども一人一人の発達について理解し、一人一人の特性に応じ、発達の課題に配慮して保育すること。

（一斉保育から選択制保育へ）

一斉というのは、子どもの差を考慮しないで、みんな同じことをさせると、子どもによって発達が違うし特性も違う。私が考えている異年齢児保育の最初のきっかけです。発達を促す場所としたときに、日本のクラス名は4月当初の年齢で言います。最初ドイツへ行った時に戸惑った。キンダークリッペ（0～3歳）とキンダーガーデン（3～6歳）までいると思った時に、どっちに3歳がいるのと思ったが、日本の年齢を言うのは4月当初です。日本は0歳何人というと、0歳児クラスは何人という言い方をします。今日現在の0歳が何人か知っていますか？通例はそうだが、指針に書かれている年齢は満年齢が書かれています。今回新しい指針に乳児保育、1歳以上3歳未満の保育があるが、これは満年齢なので、誕生日がきた子たちは、1歳以上3歳未満を見るのだが、勘違いしてしまう。最初に思ったのが5月生まれの赤ちゃんがいるとします。5月で1歳になって、立って走りはじめています。それなのに、先

月生まれた子はまだ寝返りも出来ない子と、走り回っている赤ちゃんが手をつないで歩いていくのが日本の保育なんです。赤ちゃんはそれだけ差が目に見えるのに、5歳だってそれだけ差がある。それなのに、同じ制作をさせているし、同じ場所に散歩へ行っていて、おかしいだろうと思った。昔は当然、七夕の飾りを作りましょうというと、年長は難しいのを作り、年少は簡単なのを作らせていたが、「えっ!？」と思った。概ねそうかもしれないが、ちゃんと4月と3月に分かれるの?って思った。私の前の園で、思ったことだが、土曜日は少ないので、異年齢の子たちと食事をしてた。みかんの皮を剥こうとしたが、剥けないので剥いてあげた。向こうに1歳児がいて、自分で剥いていたのを見て、剥けるのだと思って、あの子って器用ですねと先生に聞いたら、あの子のお父さんは鍵職人で、何でも開けてしまう。お母さんはパッチワークの先生ですと言って、それに同じことは無理だろう。違うことをさせる時にどこで子どもたちを分けるか。出来るかできないかではなくて、子どもたちに選ばせる。制作は年長が難しい、年少は易しい。年中は普通、この3つを先生が提案して、3,4,5歳にどれを作りたいかを聞くと、最初はバラバラらに選ぶが、自分が作れるところを選びます。ということで選択制にした。そうすると異年齢である可能性が大きい。必ずしも年長だけが難しいとは限らない。そういう意味の異年齢児保育が2つ目です。見て真似る意味と、個人個人の発達にあった課題保育、散歩に行くなら同じくらい歩け、どこで行くとか、それを同じくらいというのを子どもに選ばせ、自分がどれくらいできるか分かってもらうという意味の異年齢。ということで、一斉から選択制に変えました。それが課題保育。先生が意図をもってさせる時は、課題によって集団を分ける。おやつを配る場面。ある時に1歳児に給食の前におやつを配り、ジャム付きのパンを配っていたことがある。残すことが多く、先生は「あれ!？」っと思って、ジャムが付いているから、残しているのかもしれないと思って、ジャムが付いていないのも出してみても、工夫をして、子どもたちに食べる時に選ぶようにした。選択の意味がよく分かったが、これまでは一斉に食べさせていた。子どもたちに2つパンを出して、ジャム付きとないもの。自分で選んでいるので、極端に残食が減った。この時に分かったのが、ほとんどがついていないのを選んだ。ついていないのしか残らなくなったときに新人の先生が、配っていた時に、ついていないのしか残っていなかったの、選択させるといけないと思った時に、「こっちにジャムがついているものにする?」「そっちにジャムがついているものにする?」と子どもが選ばせていたが、選択になっていないのだが、そういっても、子どもがこっちと選ぶと残さない。選択すると責任を取ろうとする。違いがないといけないと思って、その先生は、四角いのと丸いパンどっちにすると選ばせたそう。そう選ぶことから発展して、ビスケットのおやつの日があった。この時は1枚か2枚の選択にした。これは一つは数が分かるか。その次に、子どもはどっちを選ぶかは食べられる量で選ぶ。そうすると、自分で選ぶようになった。数と量を把握できるようになった。その時に、大人でもあるが決められない子がいた。何故かという、1枚しか食べられないが2枚ほしい。次にサツマイモの日に大きい方か、小さい方か。大小で選ばせることにした。1歳でも、子どもはすごいと思ったのが、まだまだ分からないので多い方を選ぶ子もいるが、いらないと拒否したように見えたが、おちゃらけていてちゃんと先生もわかっていた。小さいうちからこういうことをしていると、きちんと自分で選択できるようになる。選択する意味で、ニューロンシナプスは生まれた後が一番多く、これを上手に減らしていきます。減らす方法は二つあり、1つが生まれたときの遺伝子でいらぬものを細胞として減らしてしまう方法。もう1つが刈り込みと言って、赤ちゃんが自分で選択して減らしていく方法がある、その時から、選択するというものを持っていて、脳の刈り込みが行われている。もっとも効果的な学習は選択させることと言われている。一斉に同じことをするところから、選択させるのも特徴かもしれません。

3条：子どもは多様な大人、子ども同士の体験から、社会を学んでいくこと。(シティズンシップ)

ペーターセンという人が、イエナプランというオランダで行っているプランがあり、ドイツのイエナ大学から実践し

たが、この人が提案したのが、小学校の異学年。一つの教室に4,5,6歳、7,8,9歳、10,11,12歳まで3学年ずつ入っている。学校という場所は社会である。ということで、社会をモデルにしたものでなければならぬということ、様々な人たち、障害のある人たち、色々な性格があってもいいとマルチエイジングという方法を取った。これが本来はインクルージョンの元。日本ではどうしても障害児も一緒というところがあるが、あらゆるものを乗り越えて、みんな一緒なのだということ。そういう意味で、社会を模したもので多様な大人がいる。子ども同士もいる。先生の違いは経験した方がいいと思っている。一度怖い先生がいて、職員から苦情が来た。子どもたちの立場では強張っていないなら、あの先生のお陰で、どんな小学校の先生で平気だよと言った。ちょっときつい先生がいても、いいんじゃないと言った。ただ1年間担任だったら辛いので、リーダーが、うちは週替わりに代わります。私の園では、3月になると年長さんはお昼寝がなくなります。その間にやる保育は、年長ばかりが担任だと休憩が取れないので、年長番と言って、全職員が1日ずつ日替わりで年長の担任をやり、その先生が考えたことをやっています。ピアノが弾ける人も出来ない人もいる。これが出来るのは、共通の理念があるということで、多様な大人を経験できるのは園の特徴で、担任を置くと逆に不安定になります。日本はどうしても担任を置くが、これが一歩進めているのがドイツのオープン保育です。担任を失くそうと全ての園の中の、誰の先生の所へ行ってもいい。オランダで小学校を見たときに面白かったのが、読書週間があって、本の読み聞かせをしますと言ったら、子どもたちが全員出て行って、その先生が私はこの本を読みますと言って、子どもはアピールして、子どもはそれを選んでいて。話が面白いだけではなくて、人気もあると思う。読み聞かせの用意をしても二人しか居ないクラスもあった。子どもたちがどこへ行ってもいいというのが、ドイツでも行われ始め、担任王国を失くそう。社会に出て、様々な人と仕事をしていくので、あまり全員が優しい言葉かけをしなくてもいいだろう。この10か条に優しい声で言いたいというのはありません。

4条：保育者は、子どもが自発的、主体的、多様な人との関係の中で活動するために、いつでも駆け込める愛着という存在でいること。

子どもたちが誰の所へ行ってもいいのだが、不安な時には行きたい先生のところがある。その先生が基地であることは必要で、子どもたちは複数持っていて、不安な時に行きたい存在がいる。抱っこしてと言う可能性もある。その時に必ず抱っこしてあげる。最近の子ども観、子ども研究が進む中で、分かってきていることだが、1歳児が先生がずいぶんやってあげていることが多いです。皆さんの園で、園長先生が何かをしようとするときに、もう少し見守らなきゃということがあると思います。必要な時には必ず手を出すのも「見守る」です。してはいけないのは、必要がないことがやってしまう。先回りをしてやってしまうことがいけないだけです。赤ちゃんが抱っこと言ったらすぐしてあげた方がいいです。それが何か理由があるからです。やってと言われたらすぐにやっけてしまいます。これには二つ理由があります。一つは、赤ちゃん象を知らない人だが、やってあげると依存するのではないかというが、子どもはそういうことはなく、自分でやれるようになることは嬉しいことで、頼まないで自分でやりたがる子の方が多い。やれるようになると、やりたがり、これが人を進化させ続けた。やれないのにやりたがる。いくらやっても、次第にやるようになる。次によく私も勘違いしていました。やってと言ったときに、自分で入れ方を丁寧に教えようと思います。教えないでやってしまう先生もいます。圧倒的に手順を教える先生がいいと思っていたが、すぐにやってあげた方がいい。自立ということだが、手順を教えると自分でやれるのは早いですが、自分にやれるようになるだけで、自立の次の段階、指針の人間関係の所にある、「人は支え合っていくために、生きていくために自立が必要」と書かれています。すぐにやってあげ方を見て、今度は人にやってあげるようになる。手順を教えると、人にやってあげるようにならない。依存はやってと言わないのでやっけてしまう。抱っこと言わないのに抱っこすると依存になるが、頼まれ

たらやる。これが応答性です。これは遊ぶことでもそう。赤ちゃんが自分の遊びの中に大人を巻き込みたいと思った時は、積極的に関わります。子どもがまき込みたくないときは介入せず、自分が必要と言ったら行けるように控えておくことが大切です。助けを求めるのは子どもたちです。そうすると、同じ友達に頼むようになるのも「見守る保育」の特徴です。ただ手を出さないのが「見守る保育」ではありません。先回りしないことが基本です、どこまでやったらと言ったらいいかといったら簡単です。頼まれなければやらない。困っているようでも、その子なりに何か考えている。最初は先生から言ってくれるだろうと思うがあえて言わない。

5条：子ども同士の中で刺激しあうということから、様々な年齢とのかかわり（見て、真似して、関わって、教わって、教えて、一緒にやって）を保障すること。（異年齢保育）

1歳児が年長に教えることもある。上が下を教えるのではなくて、経験があると教えることがある。年長さんは玩具だと思っていても、1歳児が教えると年長さんも聞いてあげるんです。それは自然なことだが、私たちは色々な事を覚えます。帰ってからアウトプットして人に教えます。脳が活発になるのはアウトプットすると動く。赤ちゃんはそれを知っているのが教えたがる。そのためには異年齢は重要なことです。

6条：子どもは、職員のチームによって、多様な社会とのかかわりを学習すること。（チーム保育）

男性職員はうちも多い。年配も女性も一つの社会を学ぶ場所です。

7条：子どもを、男女、しょうがい、年齢による刷り込みを持たないこと。（インクルージョン保育）

8条：子どもが自立していくこと、自己の意思を表明しようとすることを保育者は妨げてはならない。

子どもは自分でやろうとする気持ちが生まれてくる。それは大人が考えているよりも、まだできなことを言いだす。出来ないけど、その気持ちを寄り添って、自分で着れるんだと言いながら少し手伝ってあげる。

9条：保育者は、子どもに奉仕したり、面倒をみたりする人ではなく、一人の人格を持った人として子どもと共に生活すること。（保育者の人権）

1人の人格を持った人が人格を持った人にする仕事です。ドイツでもオランダでも、大人は子どもの椅子ではなく大人の椅子に座ります。

10条：子どもの権利条約（私案 乳幼児教育基本法）に則った保育を展開しなければならない。

権利条約があるのでそれに沿って行いましょうということで、この10か条が改めて私たちがやっている見守る保育の基本です。

どこにも手を掛けてはいけない、怒ってはいけないと書いていない。怒ることだって、これを踏まえていけば怒ることもあるかもしれないし、これを踏まえていけば結果的に年齢別でやることもあるかもしれないし、自分の思った保育をしても大丈夫だと思います。その代り共通したものを抑えておくことが必要です。何が共通なのかをわかってもらえたらと思います。最初の話はこれで終わります。ありがとうございました。

本稿は、2018年9月3日に行われた第48回保育環境セミナー2018の講演内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）